

松村先生との思い出

布 川 雅 英

0. はじめに

私が神奈川大学大学院に入学したのは、30歳になってからでした。大学卒業後、私は大東文化大学中国語大辞典編纂室で原稿作成に従事し、その後、短大の総務課で働いていました。辞典編纂室で一緒に仕事をしていた方は、皆大学院を修了されており、中国語に関する知識の豊富さに私は驚きました。私は大学院に行った方々は凄い人たちと認識していました。また、短大で働いている時も、先生方と色々お話しさせていただく機会があり、先生方から啓発され、私の中で、中国語をもっときちんと研究してみたい気持ちが徐々に深まっていきました。このような時、神奈川大学に大学院外国語学研究科が新設されるということを新聞で見つけ、受験を決意しました。無事、合格し、神奈川大学大学院に入学できました。そこで松村先生と出会えたのです。松村先生と出会えていなかったら、現在の私は存在していません。勿論、松村先生だけではなく、当時、神奈川大学居られた先生方や職員の方々にも大変お世話になり、感謝の念で一杯です。

松村先生との思い出はたくさん有り過ぎて、中々うまくまとめることが出来ません。従って、今回は修士課程、博士課程、さらに大学院修了後に分けて書きたいと思います。

なお、私の記憶が曖昧になっているため、思い込みや記憶違いがあるかもしれませんが、ご寛恕頂けましたら有りがたく存じ上げます。

1. 修士課程の思い出

私が松村先生と初めてお会いしたのは、先生がまだ神戸から神奈川大学にご出講されている時でした。当時、私は近世中国語の文法に関するところで修士論文を書こうと思っていました。直接ご指導頂いていた教授は、昨年度ご退職された山口建治先生でした。山口先生は、私が近世中国語の文法そのものに関心が強いとお感じになったのか、文法の事なら、松村先生にご指導を仰いだ方が良いということで、松村先生をご紹介頂いたのが、私と松村先生との出会いでした。

初めて松村先生とお会いした時は、とても怖そうな先生という感じでした。しかし、その後、先生と色々お話をさせて頂くと、大変優しく、学生や院生の事をいつも考えて下さる先生だと分かってきました。

私は大学時代に卒論を書いておらず（卒論自体なかったのもので）、修士論文をまとめるのに、大変苦勞しました。また、当時の中国語の語学論文は、例文を並べて結論を述べるような論文が多く、私もそのような形式で論文を書いていました。今振り返ると、とても論文に値しないものであったと思います。このような論文に値しないような論文でしたが、松村先生は私が書いた論文の中から何とか良い点を見出して頂き、且つ例文に対しても、せっかく収集した例文なのだから、一つ一つに丁寧な解説や説明を付けて分類するとオリジナリティが出て、もっと良くなるのご指導を頂きました。松村先生が神奈川大学に赴任されてからは、マンツーマンで授業をして頂き、夜の9時過ぎまで、ご指導を受けました。

松村先生と出会う前は私の考えでは、大学院生は自ら研究テーマを見つけ、研究方法も自分で作り上げていくものと思っていました。しかし、松村先生は私のような不勉強な院生にも寄り添って頂き、いつも丁寧にご指導をして下さりました。ある日、私が松村先生に、「なぜ先生はこのように丁寧にご指導して下さるのですか。」と質問したところ、松村先生は「アメリカの大学では当たり前の事で、教員と院生で論文を作り上げて行くのです。」とお答えになりました。この先生のお言葉に私は非常に感激したことを未だに覚えております。

松村先生のご指導がなければ、私の修士論文は完成していませんでした。

2. 博士課程の思い出

私の当初の予定では、大学院は修士課程で終わる予定でした。なぜなら、

年齢や学費の問題があったからです。しかし、なぜかは解りませんが、松村先生が博士課程の進学を勧めて下さいました。幸い、修士課程を修了していたので、専門学校や大東文化大学で中国語の非常勤講師の職を得て、且つ奨学金も頂くことができ、博士課程の進学を決意しました。

博士課程にも合格させて頂き、再び松村先生とのマンツーマンの授業を受けることが出来ました。今振り返ると、博士課程は自分の人生で一番幸せな時期であったと思います。松村先生との授業も勿論幸せな時間でしたが、大学院に非常に優秀な後輩が入学してくれたことも、私にとっては誠に有難いことでした。その中の一人は、現在、神奈川大学中国語学科准教授の加藤宏紀先生です。加藤先生の他にも優秀な後輩が大学院に入学して頂いたおかげで、授業以外の勉強会も行うことが出来ました。仕事と授業の予習で忙しく、勉強会の予習まで手が回らないこともありましたが、不勉強な私に様々な知識や刺激を与えて頂きました。今改めて、優秀な後輩の方々にも感謝申し上げます。

博士課程の授業では、松村先生は先ず、言語理論をきちんと身につけるよう、ご指導頂きました。先生はいつも授業で「世界的に通用する論文を書くためには、基礎となる言語理論が必要です。」と仰っていました。私は世界的に通用する論文を書く自信がなかったので、先生に対して申し訳ない気持ちになったことが思い出されます。しかし、当時の中国語の語学論文を読むと、言語理論に基づいて中国語を論理的に分析している論文はあまり多くなく、物足りなさを感じていた私は、何とか松村先生の教えを吸収しようと先生の授業でのお話を漏らすまいと、ひたすらノートに書き残していました。私の授業ノートは6冊になりましたが、今でも私の宝物となっています。未だに私は自分の研究に合った言語理論を模索していますが、松村先生は統語論のみならず、意味論にも精通し、現在は形式意味論に基づいた研究成果をご発表されています。私には無理かもしれませんが、なるべく先生の領域に近づけるよう、努力して行きたいです。

博士課程も後半になると、博士論文を書く作業に入りました。私が書いた論文原稿に対して先生は詳細に赤ペンで訂正して、返却してくださり、徐々に論文が形作られていきました。この論文作成作業は通常の授業時間だけではなく、夏季休暇、冬季休暇、春季休暇中も先生は私に寄り添い、続けて下さいました。修士論文だけでなく、博士論文も先生の親身で丁寧なご助言ご指導がなければ、完成しなかったと思います。全て私の怠慢と

不勉強で博士後期課程の3年では論文を完成することは出来ず、論文の完成に5年もかかってしまいました。しかし、松村先生は最後まで私のことを見捨てず、辛抱強く、博士論文完成までご指導して下さいました。私が書くとは俗な表現になってしまいますが、私にとって、松村先生は神様仏様以上の存在です。

3. 大学院修了後の思い出

松村先生のご指導により、博士論文を完成できたことで、私はその後、神奈川大学、千葉大学、明治学院大学、津田塾大学で中国語の非常勤講師に従事することが出来ました。大学で実際に授業を受け持つと中国語指導方法や学生からの質問に如何に答えるべきか、悩む事も多々ありました。そのような時、私は松村先生の研究室を訪ねて、先生に相談していました。先生はご多忙にも関わらず、いつも笑顔で私を迎えて下さり、親身に相談に乗って頂きました。20代で父を亡くした私にとって、松村先生は父親のような存在でもありました。先生にとっては、ご迷惑な話だと思いますが。

中国語に関して私が質問すると、先生はいつもの的確にご教授頂くだけでなく、更に先生のご研究の成果もプラスしてお教え頂きました。この時、先生のお顔の表情が嬉しそうで、且つ柔らかな表情になられていたのが、とても印象に残っています。中国語文法のお話をされる時の松村先生を見てみると、私は先生が研究者としても、教育者としても素晴らしい先生であるいつも思っていました。

松村先生はご多忙にも関わらず、意味論研究会を主宰され、大学院生と一緒に私も学ばせて頂きました。私は大学院を修了してからも意味論研究会で、松村先生のお傍で勉強させて頂くことができ、とても幸せな時を過ごす事もできました。

4. 結びにかえて

2004年に現在の勤務校である神田外語大学の専任講師の公募が出ていました。推薦者2名分の推薦書が必要であり、私は松村先生と山口先生にお願いしました。それまで100校以上の大学の専任講師公募に書類を提出しましたが、何れも願ひかなわらずの結果でした。しかし、神田外語大学になぜか採用されることになりました。研究者は根拠のないことを述べてはいけないのですが、この時、神田外語大学に採用されてのは、松村先生と山

口先生の推薦書の神通力があったからだ、私は勝手に思い込んでおります。

私の人生を振りかえってみると、小学校、中学校、高校、大学、大学院と何れも先生に恵まれていました。神奈川大学で松村先生に出会えたことにより、今の私があります。私以外にも、神奈川大学大学院で松村先生にご指導受けた後輩も皆、大学で研究職に就いています。この結果を見ても、松村先生の研究者、教育者としてのレベルの高さを表していると思います。松村先生のあの笑顔が見れなくなるのは、悲しいですが、先生を目標に、私は今後も努力して行きたいと思います。松村先生、本当にありがとうございました。